

首都圏地域における数詞アクセントの揺れ

福 島 菜 生

1. はじめに

日々、人々は数字が関連している言葉を発したり、耳にしたりすることが多い。人々は特に発音のことは考えずに言葉が出ていると考えられるが、その言葉に注目してみると人それぞれ数字のアクセントが異なることに気づく。「数字のアクセントの違い」について注目するようになったのは、弟の「4（ヨン^一）」を母が指摘したことによる⁽¹⁾。それまで「4」という数字を平板型で発音していることを特に気にしていなかったのだが、指摘されることで初めて「4の平板型は標準語ではないな」と思った。しかし、他人の発音を聞いていると平板型での「4」の発音は、友人や、アルバイト先の方の中で用いている人が多いと感じた。2020年の演習授業で、「4」の読み上げ調査を知人14名に実施したところ、10名が平板型で読んでいた。他4名は、頭高型で読んでいたものの、平板型での言い方を聞いたことがあるとの回答があった。

本稿では、数字のアクセントの違いがどの範囲で出るのか、そして首都圏内でよく使われているアクセントの実態について考察する。

2. 数詞アクセントについて

数詞のアクセントについては、川上葵（2006）によると「大概是簡単な規則の適用によって成立してい」て⁽²⁾、二桁以上の数字において、「「十」に核が有る」ものは、10・40（シジュー）・50・60・70（シチジュー）・80・90（クジュー）、「「十」の直前の音節」に核が有るものは、20・30・40（ヨンジュー）・70（ナナジュー）・90（キュージュー）が当てはまるとのことであった。また、10がつく数字は「「十」に核が有る」に当てはまる。これに分類される数字は一の位に数が何か付帯されると、「核を消す」といわれている。11・12・14（ジューヨン、ジューシ）・16・17（ジューナナ、ジューシチ）・18・19（ジュークュー）がそれが適用されてきているとのことであった。しかし、13・15・19（ジューク）は、「核は消えていない」とのことである。これらは、「それぞれ2アクセント単位に記述すべきであろう」⁽³⁾と述べられている。ただ核が消えていないというわけではなく、従来のアクセントと新しいアクセントが併用されてきているということなのだろう。そして、もう一つ、「4（シ）、7（シチ）、9（ク）」の傾向についてである。「今日の首都圏人は」、この3つの読み

方で「表そうとすることはほとんど無い」とのことだ。

次に、「数詞＋助数詞」の傾向である。ここでは、滝島雅子（2016）を見ていく⁽⁴⁾。「数詞＋助数詞」のアクセントは、若者の間では「単純化」と「規則化」が進行しているとのことである。「A 型：助数詞が低く付くもの（ただし、数詞の最終拍が長音・撥音〔ン〕・促音〔ッ〕など特殊拍の場合は1拍前にずれる）」「B 型：助数詞が高く付き、助数詞の1拍目で下がるもの」と定義したうえでアナウンサーに対して調査したところ、現在、「最も支持を得ているアクセント」は「A 型」であり、「もともとはB 型の助数詞アクセントが、長いものに巻かれる形で、数詞の上で最も多いA 型と同じになる「単純化の傾向」が見られるとされている。

続いて「規則化」についてである。元々「数詞＋円」のアクセントは、数詞の部分がそれぞれの数字によって異なるという規則があったが、「円」の前で下がるアクセント型の定着が進んできているようである。この現象は、「50・60・70（ナナジュー）・80」といった中高型で読む数字に近づいているという、「単純化」の傾向の1つと捉えることができる」とのことである。これらの先行研究で言及されている、現在の数詞に関するアクセントの傾向を踏まえながら、実際に知覚調査と使用状況調査を行っていく。

3. 首都圏における数詞アクセントのゆれについて

3-1. 調査の内容

辞書に共通して掲載のあるものを標準アクセントと考え、[参考文献]に挙げたアクセントに関するリンク・アクセント辞典を使い、それぞれの辞典の数詞のアクセントに表記の違いが生じているのかを比較した。ここで対象とした数字は「1～20・30・40・50・60・70・80・90」である。その中から多くの発音の仕方がある数字や、時代によってアクセントが変遷している数字、発音に揺れがあるように感じた数字をピックアップした。また、数詞のみだけでなく、「数詞＋円」と「数詞＋月」も追加することとした。これらも辞典を使って標準アクセントを調べたうえで選定した。選んだ単語の標準語とされているアクセントと、そうではない・標準語ではないが辞典に記載されているアクセントの2つを「聞いたことがあるかないか・使用したことがあるかないか」という2つの質問での意識調査を行った。例外があり、「14円」「15円」については、本来は「ジュー\ーヨ\エン」「ジュ\ーゴ\エン」が標準的なアクセントであるが、以前主流であった頭高型との判別をするのに難しいこともあり、先行研究で指摘されていた「単純化」が進んでいるかを明らかにしたいと考えた。「2月」「4月」に関しては、平板型と頭高型が主流なのではないかと判断し、本来の尾高型アクセントは調査していない。調査対象は、首都圏地域（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）の出身、あるいは居住したことがある方であり、年代は問わなかった。

3-2. 調査のフォーマット

Google フォームを使用してアンケート調査を行った。数詞のみについては「～にする」、「数詞＋円」は、「～のお返しです」、「数詞＋月」は、「～のイベント」という文・句を、筆

者が読み上げて録音した。回答者にはその音声を聞き、質問に答える形である。また、記述式で他の読み方を書き込む欄も設けた。調査を分析するにあたり、年齢、出身地、現在の居住地（どちらも都道府県と市区町村）の欄も設けた。

3-3. 調査結果

アンケートには、計50名の回答を得た。年齢を見ると、「15～19歳」が12名、「20～24歳」が25名、「25～29歳」が4名、「45～49歳」が8名、「50～54歳」が1名であった。出身地の内訳は、愛知県1名、宮崎県1名、京都府1名、埼玉県5名、神奈川県2名、千葉県31名、大阪府1名、東京都7名、北海道1名であった。現在の居住地の内訳は、埼玉県6名、神奈川県2名、千葉県30名、東京都12名であった。ただし、有効な回答を得られなかった項目がいくつかあるため、その項目は回答を一部除いている。そのため、項目によって合計人数に変動がある。

3-3-1. 数詞単体について

まず、二つのアクセントのうち、どちらの読みがメジャーであるのかを見ていきたい。数詞のみにおける結果は表1の通りである。表では、「聞いたことがあるか」は「聞いた」と、「使用したことがある」は「使用」と略す。なお、アクセント核の数字を○で囲んで示し、網掛け部分が標準アクセントである。

表1 数詞のみにおける馴染み度・使用実態のそれぞれの合計人数

	4にする①		4にする④		5にする①		5にする④	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	47	41	41	32	47	46	11	2
ない	1	7	7	16	1	2	37	46
	7にする①		7にする②		9にする①		9にする④	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
	48	47	31	9	48	47	6	1
ある	0	1	17	39	0	1	42	47
ない								
	13にする①		13にする③		15にする①		15にする③	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	39	20	48	46	44	26	47	45
ない	9	28	0	2	4	22	1	3
	19にする①		19にする③					
	聞いた	使用	聞いた	使用				
ある	42	22	44	35				
ない	5	25	3	12				

一桁数字においては、やはり標準アクセントに馴染みがあるようで、使用する人も圧倒的に多い。二桁数字においては、使用している人数を比較すると、「にする」の前に核があるアクセントを使っていると答えた方の人数の方が多いという結果になった。しかし、ここで注意しないといけないことは、「4・13・15・19」はどちらの読みもある程度の使用者がいるということだ。多くの回答者が、一つの数字に対して何通りかの読み方を持っていて何かしらの理由で使い分けているのである。

特筆すべき結果が出たそれぞれの数字を個々に見ていく。

まず「4」に関しては、標準アクセントでの読み方を使用している人が多いが、同時に平板型での読み方を聞いたことがある人も、それと同じ人数がいるという結果になった。また、25名が頭高型も平板型も使用したことがあると答えていた。平板型のみ使用の回答は7名である。残りの7名は平板型の読み馴染みがないと回答している。そのうち5名は千葉県に何もゆかりがない方々であり、1名は愛知県出身で現在千葉県居住者、残り1名は千葉県出身である。平板型のみ使用と7名答えたという事実は、非常に気になる。そのうち1名は聞いたこともないと答えている。頭高型での読み方を聞いたことがない人は平板型を使用する人が周囲に多いといった要因などがあるかもしれない。しかし、頭高型読みを聞いたことがある残りの6名は、どちらの読み方も知っているうえで標準アクセントではない方の読みを日頃使用している。どちらのアクセントを標準アクセントであると認識しているのか、興味深く感じる。

辞典に記載がないアクセントがこのように多くの人に使われているという結果には驚いた。「4にする①」に馴染みがあるかという観点では、計41名いたがそのうち30名が千葉県に居住した経歴を持っている。「4」の平板化は、若者の名詞の平板化傾向というわけではなく、千葉県地域のものではないかと推測する。ここで、千葉県出身者とそうでない人の、「4にする①」の使用度・馴染み度を比較する。

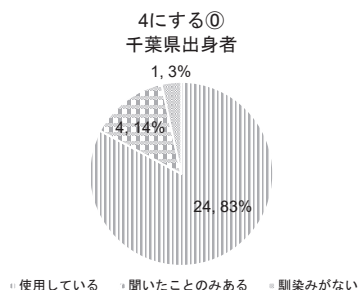


図1 千葉県出身者の割合

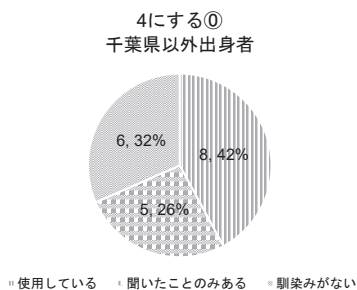


図2 千葉県以外出身者の割合

上のグラフ（図1、2）に書かれている数字は人数を表している。これを見ると、どのくらい平板型の読みが浸透しているかの差が明らかである。この結果から、千葉県で浸透し

つつあるアクセントといえるのではないだろうかと考えられる。とはいえ、他地域出身者にも使用している方がいることを踏まえると、このアクセントは広まっていくのではないだろうか。今後、どの地域で使用されてきているのかを明らかにしたい。

次に、「5」についてである。「5」に関しては、平板型に馴染みがある人はいないだろうと予想していたが、11名が「聞いたことがある」と回答していた。回答者には関西地区出身者もいたが首都圏地域の出身者もいた。使用しているのは宮崎県出身者と千葉県出身者の2名であった。ただ、千葉県出身者の方は「5にする①」を馴染みがないと答えているため、アンケートに答え間違えた可能性がある。「5」は、『新明解日本語アクセント辞典』⁵⁾によると「古くは平板型」での読みが標準とされていた。しかし、今回の調査では、「5」の平板型読みはほぼされていないという結果となった。

次に、「7」についてである。ここでは、尾高型に着目する。「ナナ\」という読み方は、今回比較したアクセント辞典には記載がなかった。しかし、地域関係なく若者間で使用している人がいるため、この読み方は許容され始めているといえる。「7」は、「個」や「つ」などの助数詞がつくと、「ナナ\」へと変化する。この変化の法則が数詞単体でも適用されているのかもしれない。「7」の尾高型読みは徐々に広まりつつあるのだろう。

次に、「9（キュー）」についてである。「9」の標準アクセントは、「7」の標準アクセントの結果と同じ傾向にあり、多数の人が使用していた。「9」の平板型は1名のみ使用すると答えているが、特にアクセントの揺れが出ない数字であることがわかった。

次に、二桁数字についてである。「13」「15」「19（ジューク）」をまとめて考察する。中高型読みに馴染みがある人が多い一方で、頭高型読みはまちまちである（表2）。

表2 二桁数字結果

	13にする①	13にする③	15にする①	15にする③
使用	20	46	26	45
聞いたのみ	19	2	18	2
馴染みなし	9	0	4	1
	19にする①	19にする③		
使用	22	35		
聞いたのみ	20	9		
馴染みなし	5	3		

頭高型の読みを聞いたことがある人数は中高型と同程度いるが、「聞いたことのみある」の回答が多いため、中高型よりも頭高型アクセントは使用されないことがわかる。「19」に関しては、そもそも「ジューク」と読まずに「ジューキュー」を使うといったような意見が三件あった。先行研究⁶⁾でも指摘があった通り、「ジューク」は使われなくなりつつあるということなのだろう。この三つの二桁数字のうち、二つ以上頭高型読みを使用している人と

一切使用しない人を抽出して比較したが、特に年代間の差は見られなかった。どちらの読みも聞いたことがある人は多いが、言語を習得する時期によく聞いたアクセントを使用する人が多いのだろう。そのため、二桁数字の従来のアクセントがどの範囲で使われるかということは、人それぞれであり、回答者のご家族の出身地なども調べなければ結果はわからない。

二桁数字アクセントを複数使用している人がいることは、結果から読み取ることが出来た。ここで、複数使用する人数や、いくつ複数使用しているのかを調べることとした。二つ以上複数使用する人を複数使用に抵抗がない人として扱う。そうすると、複数使用に抵抗がない人は20名と、全体の半分以下となった。

複数使用している人（一つのみ複数使用する人も含める）の結果を見てみると、頭高型を使用したことがある人は20名前後、中高型を使用する方はほぼ全員であった。しかし、それぞれ「使用していない」と答えている箇所が違うのである。そのため、どの読み方が複数使用されにくいかは、読み取れなかった。また、複数使用しない人は、基本的に標準アクセントではない読みを使用していた。ここから、複数使用をしている人も、第一アクセントとして使用しているのは標準アクセントではない読みであり、第二アクセントとして頭高型読みをしているというのが多数なのではないかと推測する。今後、複数使用をしている方たちがどちらを正しいと思っているのか・どちらを使用することが多いのかということも調査しなければならない。年代差などは特に結果に表れなかったが、標準アクセントではない方がメジャーなアクセントとなってきていることは確かである。

二桁数字を比較するにあたって、一つの数字につき一つのアクセントを使用しているのか、二つ以上使用しているのかというところに注目した。それを数詞全体で見ていく。二桁数字のアクセントを複数使用していた29名を見たところ、「4」を複数使用している人が16名、「5」を複数使用している人が1名、「7」を複数使用している人が6名であった。

「5」や「9」の標準アクセントでないアクセントの選択肢はかなり馴染みがないものであったため、それを除く「4・7・13・15・19」で考察していくこととする。この五語全てにおいて複数のアクセントを使用している人は2名、四語は4名、三語は9名であった。特に、二桁数字のアクセントを全て複数使用していた人に着目してみると、7名は「4」か「7」のどちらかは複数使用しており、2名は二桁数字のみ複数使用しているとのことであった。その2名は、東京都出身の方であり、「4」の複数使用をしないということは、「4」の平板型は複数使用に抵抗がない人でも使わないアクセント＝やはり地方のアクセントなのかもしれない。標準アクセントは、先に引用したように、アクセントの習得の法則がある程度明らかになっていることから、日頃から日本語のアクセントというものを意識していれば、大体の自分が使用するアクセントというものは定まるはずである。しかし、このように複数使用をするという人がいるということは、アクセントをそこまで日常で気をつけていないという人が多数なのだろう。実際、アンケート調査の協力者からも「数字のアクセントに注目したことがなかった」との意見があった。このように、人は日頃からアクセントを気にせず周りに人に合わせてしまうという傾向が少なからずあるように考えられる。

二桁数字のアクセントを複数使用していない人の傾向を次に見ていく。結果、21名のうち、「4」を複数使用している人が8名、「7」を複数使用している人が2名であった。「4」を複数使用している人は千葉県出身者が7名、東京都出身者が1名である。特に千葉県の成田市出身の人が4名おり、私の周りの人が「4」の平板型を使いがちという印象はあながち間違いでなかった。このうち1名が、「4・7」は複数使用するものの二桁数字は複数使用しないということであった。とはいっても、13名は一つの数詞につき読み方も一つと確立されている。出身地・年齢も特に偏りがあるわけではないため、日頃アクセントを意識している可能性がある。また、アンケートの回答者の中で、アンケートには「使用していない」と答えていたものの、実際にそのあと会って話していたらそのアクセントを使用していたというケースがあった。そのため、標準アクセントがどちらかを認識しているがゆえに、異なるアクセントの方を聞いたことはあるが、自分は使用していないと思い込んでいる可能性もあろう。

3-3-2. 「数詞+円」について

次に、「数詞+円」のメジャーな読み方を見ていく（表3）。

使用者の合計人数を見ると、「1円・20円・30円・40円・90円」が標準アクセント、「2円・3円・6円・8円」がそうではない読み方、「14円・15円」では中高型での読み方を使用している人の方が多いということが分かった。アクセントは変化しており、本調査の回答者は若者が多いこともあってこのような結果となったといえる。今後、「1円」が中高型に移行していくか興味がある。

まずは、「1円」についてである。先程も触れた通り、「1円」のみ平板型での読み方がまだメジャーな読み方となっている。「1円」の中高型読みは、馴染み度でいえば高いのだが、使用するに至っていないのだ。ほとんどが平板型と中高型で読み方に揺れがある結果となった。

「1円」以外は、ほぼ同ような結果が出ているが、項目ごとに一つずつ確認していく。「2円」の頭高型は、本項目で有効な回答者43名のうち、42名が使用経験があると回答をしていた。

「3円」については、頭高型での読みは回答者すべてが使用しており、平板型を聞いたことがある人数は44名中19名であった。「3」が元々平板型のアクセントであるため、「2円」よりも「3円」の方が平板型での読みに抵抗がないのかもしれない。

「6円」については、平板型での読みは約6割の人が聞いたことがあると答えている。その中には、中高型を聞いたことも使用したこともないという人がいた。

「8円」については、「1円」に次いで規則化が進んでいないという結果となった。

続いて「14円」についてであるが、「14円」は44名中42名が中高型を使用しているとのことであった。頭高型を使用している人は10名であり、そのうち9名が中高型と併用している。

「15円」については、3名以外が中高型を使用している。「15円」の頭高型読み自体は19名

表3 「数詞＋円」における馴染み度・使用実態のそれぞれの合計人数

	1円①		1円②		2円①		2円②	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	42	41	34	15	20	4	43	42
ない	2	3	10	29	23	39	0	1
	3円①		3円②		6円①		6円②	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	19	8	44	44	27	9	41	41
ない	25	36	0	0	16	34	2	2
	8円①		8円②		14円③		14円④	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	19	8	42	41	43	42	28	10
ない	24	35	1	2	1	2	16	34
	15円③		15円④		20円②		20円③	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	43	41	32	19	44	44	4	2
ない	1	3	12	25	0	0	40	42
	30円③		30円④		40円③		40円④	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	43	41	7	3	43	39	8	7
ない	0	2	36	40	2	6	37	38
	90円③		90円④					
	聞いた	使用	聞いた	使用				
ある	44	40	6	5				
ない	1	5	39	40				

が使用しているようで、「14円」よりも多い。また、「15円」に関しては複数使用している人が多いこともわかった。

続いて、1の位が0である二桁数詞を扱う。どれも同じような結果である。「20円」の中高型を使用している人は44名（全員）、「30円」の中高型を使用している人は41名、「40円」の中高型を使用している人は39名、「90円」の中高型を使用している人は40名であった。頭高型に関しては、「20円」が2名、「30円」が3名、「40円」が7名、「90円」が5名使用している。また、頭高型のみで読み上げるという方は、「30円」において1名、「40円」に5名、「90円」に4名、それぞれいた。

数詞のみの項目で、二桁数詞のアクセントを複数使用している人としていない人に分けて調査結果を見たが、「数詞＋円」でも同様に見ていく。「二桁数詞＋円」を複数使用する人は、二桁数詞単体を複数使用しているグループに属している割合が高かった。また、二桁数詞単

体を複数使用していない人でも、「一桁数詞＋円」は複数使用している人がいた。うち4名（若年層の方）は「4」単体を複数使用していた。二桁数詞は複数使用しないということなのだろう。若年層ということもあり、二桁数詞の従来のアクセントに馴染みがなく、円の前に核が来るアクセント型への移行が進んでいるようである。「数詞＋円」の項目を一つずつ見ても傾向はあまりわからなかったが、二桁数詞に関しては、頭高型を使用している人は基本的に複数使用しており、二桁数詞単体も頭高型に馴染みのある人であることが分かった。

3-3-3. 「数詞＋月」について

次は、「数詞＋月」についてである（表4）。

表4 「数詞＋月」における馴染み度・使用実態のそれぞれの合計人数

	1月④		1月⑤		2月⑥		2月⑦	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	47	35	47	44	46	39	47	42
ない	0	12	0	3	1	8	0	5
	4月①		4月②		6月④		6月⑤	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	46	41	47	42	46	38	46	42
ない	2	7	1	6	1	9	1	5
	7月④		7月⑤		8月④		8月⑥	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	46	35	46	43	44	37	48	42
ない	1	12	1	4	4	11	0	6
	10月④		10月⑥		11月⑥		11月⑦	
	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用	聞いた	使用
ある	45	37	45	39	45	37	45	40
ない	3	11	3	9	2	10	2	7
	12月⑤		12月⑧					
	聞いた	使用	聞いた	使用				
ある	45	41	46	40				
ない	3	7	2	8				

「数詞＋月」については、二通りの読みの合計人数がそこまで変わらなかった。それぞれの項目において人数が全て僅差であり、人々は二種類以上の読みを保有しているということが読み取れる。メジャーなアクセントというのは本調査では図れなかった。ここから、一つの言葉に対して複数のアクセントを使用している人が多いということがわかる。逆に、それぞれの言葉で約3～4割の人は複数使用していないことになる。

次に、それぞれの使用状況を見てみると、平板型は使用しないという人や、尾高型は使用しないという人がいることがわかった。その方たちの傾向を踏まえても、「一桁数詞＋月」は平板化がかなり進んでおり、「二桁数詞＋月」は平板化への過程の途中であることがわかった。さらに、月によって読み方が異なると答えた人もいる。回答を見ると、出題の順番の影響で間違えて回答している可能性のある人もいた。しかし、そうではない人もおり、平板型・尾高型の使用しない数を比較したところ、尾高型を使用しない人の方が多かった。平板型・尾高型の地域別や年齢別の使用状況の差はないようであるが、全体の傾向として平板型の読み方が台頭してきているということがわかる。

ここからは、頭高型と平板型の二通りで調査を行ったものに注目していく。2月も4月も頭高型読みは辞典に記載がないが、多くが使用しているとの結果が出た。次に、平板型を使用しない人を確認していく。どちらか一方の人も含め、平板型を使用しない人は9名いた。「2」も「4（シ）」も頭高型読みをする言葉であるため、その影響が「2月」と「4月」にも表れているのではないだろうか。

「数詞＋月」は年齢差や地域差というものは現れない単語であり、回答者の中でも読み方が複数使用されることの多い単語であることが分かった。また、どちらか一方のみ使用する人もおり、それは個人の自由によつて委ねられるものである。留意点として、今回「－月のイベント」という句を質問したが、この場合のみ平板式の読み方が浸透しているという可能性もあるだろうと考える。「イベントを－月に行います」などの文では結果が変わるのではないだろうかと推測もできる。

3-3-4. 三項目を通して

ここからは興味深い回答をしている人の全体の項目の傾向を見ていきたい。数詞が平板化していることに興味を持ちこの調査を行ったため、平板化が進んでいる人を見ていく。多くの人が平板型アクセントを使用している語を除外した17語のうち10語以上平板型で読み上げている人に絞った。この範囲の中で10語以上使用している人は計26名いる。この26名はやはり「数詞＋月」に平板型を使用している割合が高い。平板型を使用している人数が少ない「2円・3円・6円・8円」を平板型にする人は、この人数の中に入っている。また、「一桁数詞＋円」を平板化する人は全体的に平板型に抵抗がない人なのではないかと推測する。他には、千葉県出身の若者である25人中16名や、「4にする⑩」を使用していると答えた32名のうち23名が該当している。ここから、「4にする⑩」は地域的なアクセントでありながらも、名詞の平板化現象の一部でもあるのではないだろうかと考える。

3-3-5. 家族間の比較

ここでは、母・父・私の三者間比較を行う。「聞いたことがある」という項目においては、家族以外の人と関わる機会も多いため、特に家族間での比較に影響はないと判断した。そのため、使用しているかどうかの項目において比較した（表5）。

表5 家族間で、使用しているアクセントの差が出たもの

	4にする①	15にする①	19にする③	1円①
母	ない	ない	ない	ある
父	ない	ある	ある	ない
私	ある	ない	ない	ある
	1円②	8円①	14円①	15円①
母	ない	ない	ない	ない
父	ある	ない	ある	ある
私	ある	ある	ない	ない
	1月①	2月①	4月①	6月①
母	ない	ない	ない	ない
父	ある	ある	ある	ある
私	ある	ある	ある	ある
	7月①	8月①	10月①	11月①
母	ない	ない	ない	ない
父	ある	ある	ある	ある
私	ある	ある	ある	ある
	12月①			
母	ない			
父	ある			
私	ある			

母と父では出身地など育った環境が違うため、使用するかしらないかの差が出るのも当然である。そして、母が使っているものの父は使っていないアクセントも、父が使っていて母が使っていないアクセントを両方とも私が使っていることは、家族が使用している読み方を成長の過程で無意識のうちに習得していったことによると考える。母と父に差が出ているものは、私はどちらにも馴染みがある。ただ、数詞のみについてはあまり家族間で口に出さない言葉ではあるため、どちらかが使っていてもあまり馴染みがないものもあった。特筆すべきは、母も父も使用していない、「4」の平板型と「8円」の平板型だ。私は家庭以外で耳にしたものを自分のものとして組み込んでいったのであろう。

4. まとめ

数詞単体と「数詞＋円」、「数詞＋月」の三つの項目を見てきた。それぞれの項目で標準アクセントが使われることが多いと予想していたが、「数詞＋円」「数詞＋月」ではそうはならず、標準アクセントでないアクセントが人々に使われているという項目もあった。また、首都圏という範囲の中ではアクセントの使用状況にほぼ差が出なかった。個人的に興味を抱いていた「4」の平板型に関しては地域的な差が出たといえるであろう。

しかし、アクセントというものは各人の育った環境や周囲の人のアクセントの使用状況によるものであり、個人個人でどのアクセントを使うのか、一つの言葉につきアクセントをいくつ使用しているかが異なるのは当然だということがわかった。とはいえ、傾向として、二桁数詞に関係するアクセントは、頭高型から中高型もしくは尾高型へと変わってきているようである。数詞単体も、言葉の後ろの方を高く読む読み方が使用されていたりもする。「数詞+円」に関しても、中高型を使う人が増えており、そちらが標準アクセントとなる日が来るのではないだろうか。また、今回の調査で一つの言葉のアクセントを複数使用している人が多かったことは印象的である。そして、アクセントには流行というものがあるようである。(日本女子大学においても「述べている」のアクセントが平板式を使用することが多いと坂本清恵先生から伺った)。「4」の平板型も、傾向として挙げた三点も、地域的なことは一旦置くと、「今」の流行のアクセントと捉えることも出来るだろう。

5. 今後の課題点

作成した文や句自体を聞いたことがあるかで判断して回答してしまった人がいるようであり、有効回答を全員分得られなかった項目があった。このようになることを想像していなかったのだが、配慮すべきであった。また、このように聞き取り調査では誤って回答してしまう人が出るため、正確さを保つために読み上げ調査を行わなければならない。今回一つの言葉につき複数の読み方を使用しているとの回答が多かったが、その方達が何を普段は使っているのか、また何を標準アクセントだと認識しているのかを明らかにするためにも読み上げ調査は必要である。本論文では、年齢・出身地に偏りがあったため、あまりその差が見られなかったことも課題点である。満遍なく様々な人にアンケートを取り、首都圏地域における数詞アクセントの揺れの実態を明らかにしていきたい。

注

- (1) 本稿のアクセント注記は、NHK 放送文化研究所『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(NHK 出版、2017年9月)に採択されたNHK 放送研究所「新辞典の使い方」(<https://www.nhk.or.jp/bunken/accent/faq/1.html>)にある、「音の下がり目の位置を示す記号「\」と、下がり目がない場合(＝平板型)に語末につける記号「—」」によって示す。
- (2) 川上葵「最近の首都圏語のアクセント変化」(『音声研究』10巻、2006年)。
- (3) 滝島雅子「NHK アクセント辞典 “新辞典” への大改訂 (3) 「数詞+助数詞」の発音とアクセント—変化の動向と新辞典への反映—」(『放送研究と調査』66巻、2016年)。
- (4) (3)に同じ。
- (5) 金田一春彦監修、秋永一枝編『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD 付き 別冊 アクセント習得法則』(三省堂、2021年)。
- (6) (3)に同じ。

参考文献

- ・NHK 放送文化研究所「数詞の発音とアクセント」(https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20180501_4.html)
- ・NHK 放送文化研究所『NHK 日本語発音アクセント辞典新版』(NHK 出版、1998年)

- ・金田一春彦 監修、秋永一枝 編『新明解日本語アクセント辞典』（三省堂、2001年）
- ・日本放送協会『日本語アクセント辞典』（日本放送出版協会、1957年）
- ・日本放送協会『日本語アクセント辞典』（日本放送出版協会、1951年）
- ・小野曉、早田輝洋「東京方言の助数詞のアクセント」（『大東文化大学紀要人文科学』37号、1999年）